

2025 学校評価

「自己評価」

(2026/2/4)

サミットアカデミーエレメンタリースクール長野

《学校評価について》

サミットアカデミーセカンダリースクール長野および、サミットアカデミーエレメンタリースクール長野では、両校が掲げる教育理念および目指す理想像の実現に向けて、日々の教育活動や学校運営の在り方を振り返り、成果と課題を明らかにすることを目的として、以下の内容で学校評価を実施する。

I 目指す学校像

教育理念「自由と愛」のもと、児童・生徒一人ひとりが、それぞれの個性が尊重され楽しく充実した学校生活を送ることを通して、日本人としての資質とグローバルに活躍できるマインドとスキルを兼ね備え、世界の舞台で自分らしく地球に貢献できる人材となることのできる教育環境の整備を積極的に推進する。

II 重点目標

1. 児童・生徒が主体的に学ぶことができる魅力ある授業を提供できるよう教科指導法の研鑽に努める。
- 2 児童・生徒が英語 4 技能（聞く、話す、読む、書く）を習得することができる環境と方策を用意し実践する。
- 3 児童・生徒一人ひとりがお互いの個性を認め合い、尊重し合い、高め合える学級や学年・学校をつくる。
- 4 児童・生徒が心身ともに健康で明るい学校生活を送れるよう、一人ひとりの人権を尊重し、安心・安全な学校づくりを進める。
- 5 学校の教育活動等の情報を、児童の保護者、本校の志願者、地域に対し幅広く発信し、地域社会に貢献できる学校づくりを推進する。

III 学校評価の目的

サミットアカデミーが目指す学校像と重点目標の実現を図るために、学校評価を行う。もとより学校評価の目的は「学校運営の改善と発展を目指すことにより、教育水準の向上と保証を図る」ことにあり、「学校評価を行うことによって、児童・生徒がより良い学校生活を送ることができるようにする」ことが求められる。具体的には以下の3点を目的として実施する。

- 1 自らの教育活動その他の学校運営について、目指すべき目標を設定し、その達成状況や達成に向けた取組の適切さ等について評価することにより、学校として組織的・継続的な改善を図ること。
- 2 自己評価及び保護者など学校関係者等による評価の実施とその結果の公表・説明により、適切に説明責任を果たすとともに、保護者、地域住民等から理解と参画を得て、学校・家庭・地域の連携協力による学校づくりを進めること。
- 3 学校評価の結果に応じて、学校に対する支援や条件整備等の改善措置を講じることにより、一定水準の教育の質を保証し、その向上を図ること。

IV 学校評価の形態

学校評価を有効的・機能的に推進するために、実施手法として「自己評価」と「学校関係者

評価」を行う。また、必要に応じて保護者や児童生徒を対象にしたアンケートを実施して、自己評価や学校関係者評価の資料として活用することで、より精度の高い学校評価とする。

1 自己評価

校長のリーダーシップの下で、全教職員が参加し、設定した目標や具体的計画等に照らして、その達成状況や達成に向けた取組の適切さ等について評価を行う。

2 学校関係者評価

学校評議員、保護者や地域住民の代表その他の学校関係者が、学校の教育活動の観察や意見交換等を通じて、自己評価の結果について評価することを基本として行う。

V 自己評価の方法

全 10 項目について、教職員からの 4 段階評価とその根拠や改善点のレポートをもとに、学校としての評価をまとめている。4 段階評価は以下の基準に基づいている。

- A：計画的・継続的に取り組み、工夫や改善を重ねることができた。児童生徒の変化や成果が見られた。
- B：概ね取り組むことができた。一定の成果はあったが、改善の余地もある。
- C：意識はしていたが、十分な取組には至らなかった。今後の課題が明確である。
- D：十分に取り組むことができなかった、または課題が大きく残った。

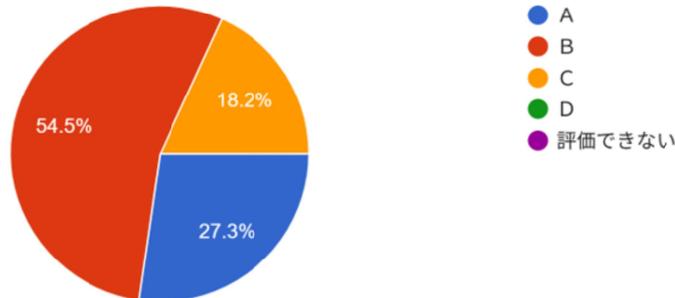
なお、今年度は自己評価の参考資料とするため、教職員による自己評価の前に、保護者アンケートを実施している。

《2025 年度 自己評価》

1 学ぶ意欲・主体性

児童生徒の学ぶ意欲を引き出す工夫を行い、主体的に取り組む態度を育む授業を行うことができたか。

【評価】 < B >



【評価の根拠（工夫・意識した点、成果）】

児童の実態や興味・関心に応じた授業づくりを行い、身近な題材や体験的な活動を取り入れる工夫を重ねてきた。導入段階を工夫し、すべての児童が参加しやすい活動を設定することで、その後の学習へとスムーズにつなげることができた。

また、五感を働かせて事象を捉え、考えたことを言語化する学習を丁寧に積み重ねた結果、特に文章で表現する「書く力」の向上や、学習への意欲の高まりが見られた。保健指導などにおいても、話を聞くだけでなく実際に活動する時間を設けることで、児童が楽しみながら主体的に学ぶ姿が見られた。

一方で、今年度は授業改善を具体的な実践レベルまで十分に深めることができたとは言えず、主体的に学習に向かう児童は依然として一部にとどまっている点が課題として挙げられる。

【課題と改善点】

授業において、ワークブックやテストを用いた一方向的な学習に偏る場面が見られ、児童同士が考えを伝え合い、学びを深める活動を十分に取り入れることができなかった点が課題として挙げられる。今後は、対話や協働を重視した学習活動をより意識的に取り入れていきたい。

また、探究的な学びのある授業について、教職員間で十分な共通認識をもつことができていなかった点も課題である。児童が自ら課題を見つけ、探究的に学ぶ力を育成するためには、調べ学習の方法や手だてを見直し、児童の実態に即した学習方法を工夫していく必要がある。今後は、児童中心の学習活動や評価の工夫をさらに進め、授業のねらい・手だて・振り返りを明確にした指導を通して、すべての児童が主体的に学びに向かう授業改善に取り組んでいく。

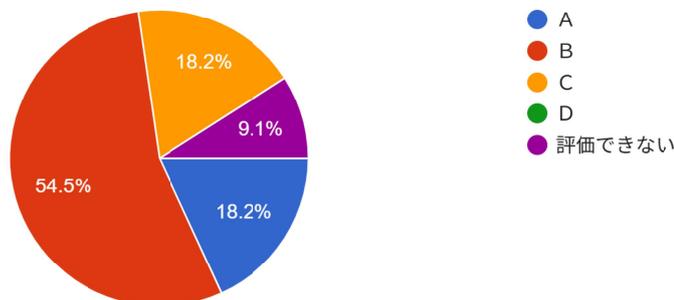
さらに、苦手意識のある活動に対しては、事前に複数の方法や選択肢を提示することで、より多くの児童が安心して参加できるよう配慮していきたい。学習の進度と行事や特別活動との調整、学習への動機付けの難しさについても引き続き課題として捉えている。

今後は、振り返りの時間を大切にし、学習内容同士のつながりを意識した授業展開を行うとともに、発言や参加に消極的な児童も主体的に関われるよう、課題の提示方法や活動の進め方を工夫していく。

2 思考力・表現力等

問題発見力・課題解決力・表現力・コミュニケーション能力の育成を意識した授業を展開できたか。

【評価】 < B >



【評価の根拠（工夫・意識した点、成果）】

対話を重視した授業づくりを進め、グループ活動を積極的に取り入れることで、児童同士や教師とのやり取りを通して学びを深めてきた。協働的な学習を通して新たな視点や考えが生まれ、表現力やコミュニケーション能力の向上が見られた。

授業では、毎時間「なぜそう思うのか」「どうしてそうなるのか」と問いかけ、個人やペアで考える時間を確保するとともに、「失敗しても間違えてもよい」という安心して意見を出せる雰囲気づくりに努めた。また、グループ編成を工夫し、さまざまな児童と関わる機会を意図的に設けた。

さらに、日頃から意見共有やブレインストーミングを行い、課題を具体化することで、問題発見力の育成につなげてきた。算数の授業では、タイムラインを用いた学習を通して、逆算的に考える必要性に児童自身が気づく場面も見られた。

一方で、評価と授業を一体的に進める取組は十分とは言えず、振り返りの充実や継続的な評価の工夫については、今後の課題として残っている。

【課題と改善点】

カリキュラムの見直しを進めるとともに、育成したい力をより明確にしたうえで、授業改善に取り組んでいきたい。児童が臆することなく自信をもって話す力を育てるとともに、友だちの意見を尊重し、傾聴する姿勢を身に付けさせ、話し合いを通して集団で学ぶ楽しさを実感できる関係づくりを目指す。

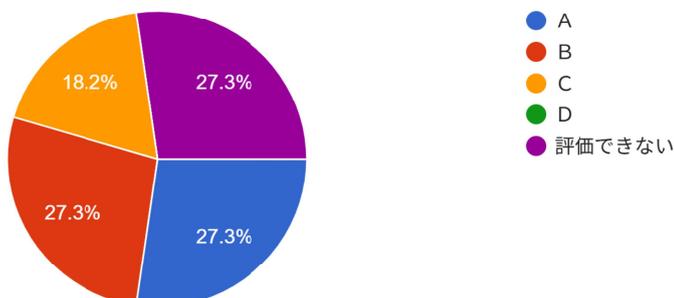
一方で、言語理解に課題を抱える児童もおり、語彙の理解に時間を要することで、思考を深めるまでに至らず、学習の遅れが生じる場面が見られた。また、多くの児童において、課題を見いだしたり、自分の考えを適切な言葉で表現したりするために、さらなる支援が必要であることも明らかになった。

今後は、振り返りの場면을計画的に位置付けるとともに、文章の型や話型などの支援を充実させ、表現に不安のある児童も安心して発言できる環境を整えていく。また、発言する児童に偏りが見られることを踏まえ、質問の内容を明確にするとともに、相手の話を聞く姿勢を育てる指導を行っていきたい。国語など特定の教科に限らず、あらゆる教科で表現の場を意図的に設定し、統一した指導のもとで協働的に学ぶ力の育成を図っていく。

3 英語 4 技能

英語 4 技能（聞く・話す・読む・書く）をバランスよく育成するための学習機会を意識的に用意できたか。

【評価】 < B >



【評価の根拠（工夫・意識した点、成果）】

英語教育においては、4技能（聞く・話す・読む・書く）の習得を意識した指導を行ってきた。学年や児童によって技能の習得状況に差が見られ、特に低学年や英語学習経験の少ない児童に対する支援が十分でない場面があった。一方で、日常的な会話活動や歌唱活動、動画を活用した授業を通して、聞く力や状況を理解する力は着実に向上しており、英語に対して興味をもち、積極的に参加する児童の姿も多く見られた。また、インターナショナルティーチャーによる指導の際には、児童が英語で話す機会を意識的に増やすことで、実践的な言語使用の場を設定することができた。

授業では、指示に従って行う活動や物語の読解・再話、日常生活に関するスピーキング・ライティング活動など、多様な方法を取り入れながら、4技能をバランスよく育成することを目指してきた。しかし、読む・書く活動については、事前準備や教材研究が十分とは言えず、学習評価が一部不明確になる場面もあった。さらに、児童一人ひとりの理解度に応じた指導の工夫や個別支援が十分でなかったため、技能習得における差が広がる傾向も見られた。

【課題と改善点】

児童の4技能（聞く・話す・読む・書く）の習得を意識した指導に取り組んできたが、特に学習レベルの低い児童に対する実態把握や支援が十分ではなかった。児童の中には、学校生活の中で英語を用いた会話の機会が少なく、家庭での学習や練習も十分でないことから、英語力の伸びが遅れが見られる場面があった。なかでも「聞く力」の育成については、日常的に課題を感じており、今後の重点課題として取り組んでいく必要がある。

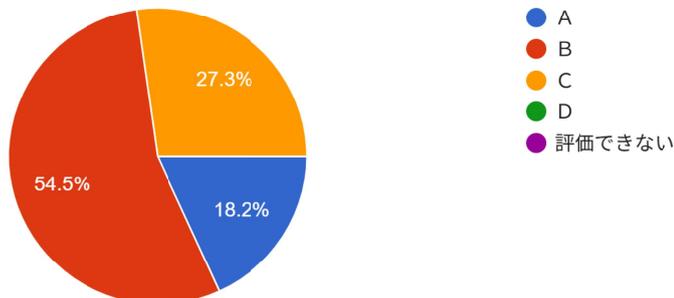
授業においては、児童が自然に英語で話す・聞く機会を取り入れた活動を行ってきた一方で、読む・書く活動については、より意図的な教材研究や事前準備が不足しており、学習評価が児童の実際の力を十分に反映しているとは言い難い部分もあった。また、児童一人ひとりの学習状況や理解度に応じた個別指導や差別化が十分ではなく、すべての児童がバランスよく4技能を習得できる学習環境の整備が課題として残っている。

今後は、授業設計の段階から4技能を計画的に位置付け、児童が自信をもって英語を使用できる機会を意図的に増やしていきたい。あわせて、家庭での学習支援や保護者への情報共有も含めた包括的な支援体制を整えていく。また、教員間での教材研究や指導法の共有を進め、個々の児童に応じた支援が提供できるよう改善を図ることで、技能習得の格差の是正を目指すとともに、全体的な英語力の向上につなげていきたい。

4 人間関係・学級経営

児童生徒がお互いを認め合い尊重し合える関係を築ける生活指導や学級経営を行うことができたか。

【評価】 < B >



【評価の根拠（工夫・意識した点、成果）】

仲間づくりを意識した活動や授業を通して、児童同士が互いを認め合い、協力し合う関係づくりに継続して取り組んできた。学級目標を年度当初から掲示し、「互いを知る・話を聞く・尊重する」ことを日々確認・振り返ることで、友だちとの関わりについて考える共通の基盤を築いてきた。その結果、児童同士の関わりの中で、思いやりや共感をもって行動しようとする姿が多く見られるようになった。

児童間でトラブルが生じた際には、当事者双方の話を丁寧に聞き取り、教職員間で情報を共有しながら組織的に対応した。また、良い行動や取組については学級全体に伝わるよう言葉にして称賛し、改善が必要な点については、理由や根拠を示しながら、個別または全体にその都度指導を行ってきた。

さらに、「ほめほめタイム」など、友だちの良いところを見つけて共有する活動を取り入れるとともに、日常的に教員が児童の良い言動に目を向け、積極的に認めることを大切にしてきた。集団としての意識を高める声掛けや活動を通して、みんなで生活し、学ぶことの意義を実感できるよう努めた。

加えて、多様性について話し合う機会を設け、互いの違いを理解し尊重しようとする意識を育てることで、児童が安心して学べる学級風土の形成につなげてきた。

【課題と改善点】

問題が生じた際には迅速に対応し、学級経営や生徒指導を通して良好な人間関係づくりに努めてきた。しかし、対応後も互いを認め合い、尊重し合う関係として継続的に定着させていく点には課題が残った。

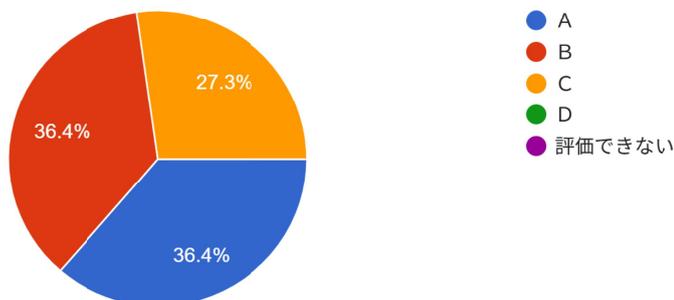
否定的な言動をする児童は減少してきているものの、自分の気持ちを優先し、周囲への影響に十分気づかないまま行動してしまう児童が一部に見られた。そのため、周囲の状況を見て考え、集団の一員として適切に行動する力を育てるための指導の必要性を感じている。

また、気持ちを素直に表出できる児童に対しては丁寧に寄り添うことができた一方で、言いたくても言えない児童に対して十分に関わりきれなかった場面もあり、すべての児童に寄り添う支援の在り方が課題である。

今後は、目的や手だてを明確にした指導と評価を児童と共有するとともに、社会性や感情面に焦点を当てた学習を充実させ、振り返りや対話の時間を意図的に設定していく。また、学年・学級を越えた交流の機会を段階的に増やし、日常の行動として実践につながる人間関係づくりを進めていく。

いじめ・暴力・SNS トラブル等を未然に防ぐための啓発活動や情報収集に継続的に取り組むことができたか。

【評価】 < B >



【評価の根拠（工夫・意識した点、成果）】

本年度は、児童一人ひとりの状況を丁寧に把握し、トラブルやけがが発生した際には、迅速に情報収集を行い、担任と連携して対応してきた。いじめについては「絶対に許さない」という方針を繰り返し伝えるとともに、目撃しながら何もしないこともいじめに当たるという認識を児童に促してきた。

また、手が出てしまう児童や暴力的な行動が見られる児童に対しては、その背景にある心理状態の理解に努めながら、暴力行為は決して認めない学級づくりを意識し、言葉遣いや伝え方にも配慮して指導を行った。日常的な声かけや学級活動を通して、友だちとの適切な関わり方や困ったときの伝え方、謝罪や解決の方法についても継続的に指導し、児童同士が協力し思いやりをもって関わろうとする態度の育成に取り組んだ。

一方で、いじめや暴力、SNS に関する意識啓発活動については、時間や人的リソースの制約から、体系的・計画的に実施するには至らなかった。また、弱い立場にある児童へのより一層の配慮や、事前の予防的指導も十分とは言えず、今後はより構造的な取組や専門機関等の支援も活用しながら、児童が安心して学べる安全な学級・学校環境の整備を進めていく必要がある。

【課題と改善点】

本年度は、いじめ防止や SNS の安全な利用、友人関係に関する指導を計画的に実施する点に課題があった。いじめ月間としての取組を十分に行うことができず、学年が上がるにつれて、いじめが起こりにくい学級・学校環境を構造的に整えていく必要性を感じた。日常的には、攻撃的な遊びや言動が見られた際に、その都度注意や指導を行ってきたが、弱い立場にある児童や仲間外れにされた児童への配慮が十分でない場面も見られた。こうしたことから、iPad の使用方法や友だちへの言葉遣いなど、学校全体で共通のルールや配慮事項を明確にし、継続して伝えていくことの重要性を再認識した。

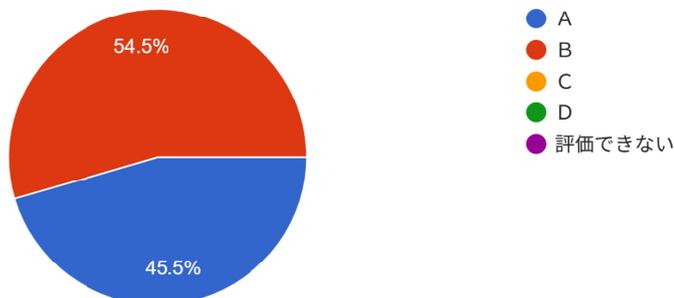
今後は、児童一人ひとりの行動の背景や心理状態を理解しながら、計画的かつ体系的な啓発活動を位置付けていく必要がある。具体的には、いじめやトラブルが起こる前に気づきを促す予防的な活動や、デジタル機器の安全な利用、互いを尊重する姿勢の育成を、授業や学級活動の中に意図的に組み込んでいく。また、継続的な観察や指導に加え、スクールカウンセラー等の専門的支援の活用についても検討していきたい。

本年度の取組と課題を踏まえ、今後も児童一人ひとりの立場や状況に応じた丁寧な対応を継続するとともに、学校全体で共通認識を持った指導を行うことで、いじめやトラブルの未然防止と健全な人間関係の形成に努めていく。

6 体罰・人権

体罰や暴言と受け取られかねない言動を防ぐため、人権意識を常に持って指導にあたることができたか。

【評価】 < B >



【評価の根拠（工夫・意識した点、成果）】

「大人にしないことは子どもにもしない」という観点を大切に、児童一人ひとりの人格を尊重した指導を心がけてきた。行動や言動への指導においては、否定から入るのではなく、まず丁寧に話を聞き、児童の状況や気持ちを踏まえた対応を行った。また、呼び方や言葉遣いにも十分配慮し、学級や学年を問わず、すべての児童が大切にされていると感じられる学習環境づくりを意識した。

指導方法としては、身体的接触を極力避け、言葉による適切な働きかけや行動のリダイレクションを中心に行った。日常的には、明確な学級ルールを示すとともに、正の強化（ポジティブ・リインフォースメント）を活用し、児童が安心して学び、自己表現できる環境の整備に努めた。さらに、児童同士の関わりにおいても、思いやりや尊重、共感の姿勢を育む活動を取り入れ、権利侵害や暴言、体罰のない、安全で包括的な学級運営を進めてきた。

今後も、指導や対話の場面において言葉選びや関わり方に十分配慮し、児童が安心して自分の意見を表明できる環境を維持するとともに、人権意識に基づいた指導の一層の充実を図っていく。

【課題と改善点】

日常の関わりや児童の話を書く際には、丁寧に接することを意識し、児童一人ひとりが安心して学べる環境づくりに努めてきた。一方で、今後も児童の成長段階に応じた適切な関わり方を工夫し、人権意識を継続して高めていくことが課題である。

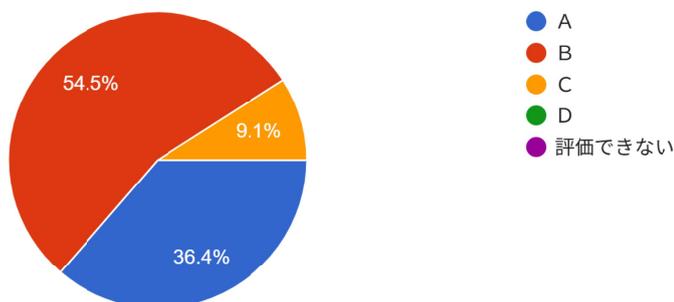
指導にあたっては、声の大きさや伝え方の強さが過剰にならないよう留意し、常に穏やかで丁寧な対応を心がける必要がある。また、教職員間で児童への対応に差が生じないように、共通認識を持ち、全児童に対して一貫した指導を行うことが重要である。具体的には、敬称や呼び方の統一を図るなど、細部にわたる配慮を徹底していく。

これまで、児童の行動に対して一部教職員の対応が強くなってしまいう場面も見られたことから、今後は研修やプロフェッショナルガイダンスを通して、常に安全で尊重された学級環境を維持できるよう支援体制を強化していく。また、繰り返し見られる行動上の課題に対しても、継続的な振り返りと指導方法の工夫を重ね、柔軟に対応していく。これらの取組を通して、すべての児童が安心して学び、自己表現できる環境の実現を目指す。

7 安全・防災

災害時対応、不審者・防犯対策、事故防止等について理解を深め、安全・安心な学校づくりに取り組むことができたか。

【評価】 < B >



【評価の根拠（工夫・意識した点、成果）】

児童の安全確保を最優先に、避難訓練や交通安全教室を計画的かつ効果的に実施してきた。特に第2回交通安全教室では、交通安全協会の方を招き、実際に見たり聞いたりする体験を通して学ぶことができ、児童の安全意識を高める有意義な機会となった。日常生活においても、登下校時や休み時間の見守り体制を整え、児童が危険な行動をとらないよう配慮してきた。また、教職員を対象とした AED 講習等の研修を実施し、緊急時に迅速に対応できる体制づくりを進めた。

さらに、教室内外の整理整頓や通路の確保、密閉空間の回避、トイレの巡視など、日常的な安全管理にも継続して取り組んだ。怪我につながる恐れのある箇所や設備の破損については定期的に点検を行い、畑や校庭への移動を含め、学校生活全般において事故防止を意識した見守り体制を維持してきた。加えて、災害時や不審者対応に関する指導、安全意識・防災意識を高める取組を長期休業前を中心に実施し、児童が自ら身を守る力を育む機会を設けた。

一方で、教職員の指導や安全管理が十分に行き届かない場面も見られ、より計画的かつ組織的な安全教育の推進や見守り体制の一層の強化が課題として挙げられる。今後も、日常の安全指導や防災訓練を継続するとともに、教職員間での共通理解を深め、児童が安心して学べる環境づくりをさらに推進していきたい。

【課題と改善点】

災害時対応については、対応の詳細や具体的な手順の周知が十分とは言えず、今後の重要な課題として取り組む必要がある。授業中に教室から出てしまう児童への対応については、これまで情報共有や協議を重ねてきたものの、依然として児童が一人にならないような組織的な対応が求められている。担任が児童の行動を把握したうえで、1階に降りてきた際に誰が対応するのかなど、役割分担や対応の流れについて、職員全体での共通理解を一層図る必要がある。

また、事故やけがが発生しやすい休み時間、給食、清掃中においては、より多くの教職員が意識的に目を配り、全職員で関わる見守り体制を強化することが重要である。

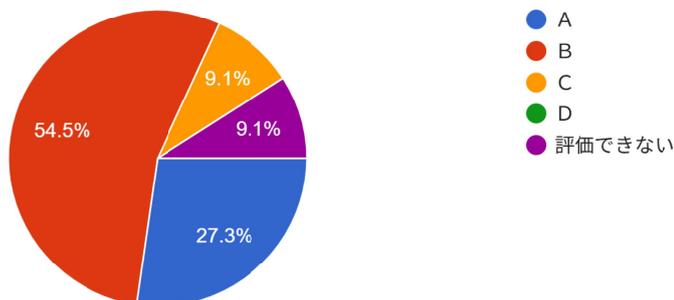
一方で、児童への安全に関する意識付けについても、十分に浸透していないと感じられる場面があった。下校時に駅まで引率する際には、他学年の児童への指導が行き届かない場合もあり、学年を越えた対応の難しさが課題として挙げられる。

現状の学校体制では、災害対応、事故防止、犯罪防止に関する知識や経験を教職員全体で十分に深めることができているとは言えず、管理職の主導による積極的な取組や、体系的な研修・訓練、支援体制の充実が求められる。今後は、こうした取組を通して、教職員一人ひとりが役割を自覚し、常に安全で安心な学校環境を維持できる体制づくりを進めていくことが課題である。

8 保護者・外部対応

保護者や外部からの相談・意見に対し、誠実かつ適切に対応・回答することができたか。

【評価】 < B >



【評価の根拠（工夫・意識した点、成果）】

保護者からの相談や意見に対しては、常に誠実に対応することを心掛けてきた。特に、けがや体調の変化については、その場限りの対応にとどめることなく、経過を継続的に把握し、児童本人や保護者に状況を確認するよう努めてきた。また、必要に応じて担任や関係職員と情報を共有・協議し、児童が安心して授業や学校生活に参加できるよう配慮してきた。

日常的には、毎日の連絡帳の確認を欠かさず行い、保護者とのやり取りを丁寧に重ねることで、信頼関係の構築に努めてきた。伝え方や話すタイミングにも十分配慮し、保護者が不安や誤解を抱くことのないよう、真摯かつ分かりやすい対応を心掛けてきた。保護者から寄せられた情報や相談内容については、必ず担任に共有し、必要に応じて関係職員とも連携を図ることで、迅速かつ継続的に報告・対応する体制を整えてきた。

一方で、業務の時間的制約や体制上の課題により、十分なコミュニケーションの機会を確保できない場合もあり、すべての相談や意見に対して一貫した対応が難しい場面や、十分な説明ができなかったケースもあった。

【課題と改善点】

保護者への情報発信については、今後さらに充実させていく必要がある。特に、放課後ラボ（アフタースクール）でのトラブルに関しては、より慎重かつ丁寧な対応が求められる。放課後ラボでの出来事や子どもたちの様子については、毎日ラボ側から学校へ報告を受けているが、報告の仕方や保護者の受け取り方によっては、誤解や混乱が生じるおそれもある。そのため、学校として正確な情報を把握し、適切に整理したうえで共有できる体制を整えていきたい。

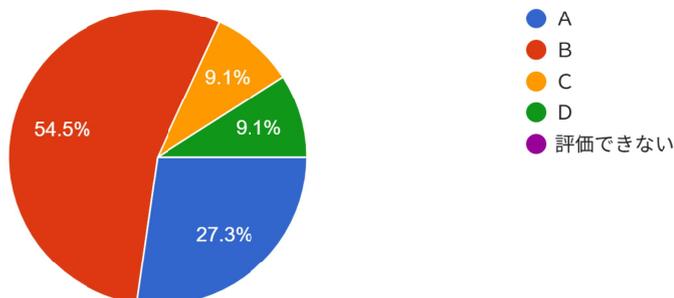
また、保護者からの相談に対して、説明が十分でなかったために不安を与えてしまった事例もあった。今後は、教職員間での相談や情報共有をより徹底し、必要な内容を整理したうえで、正確かつ分かりやすい説明を行うことが重要であると考えている。

さらに、学級や教員に対して否定的な問い合わせや相談が生じにくい環境をつくるためにも、日頃からの学級経営や児童理解を大切にし、保護者や児童との信頼関係の構築に努めていく必要がある。現状では、時間的制約や構造化されたコミュニケーションの機会が限られており、保護者や地域の声に十分に答えることが難しい場面もあった。今後は、保護者や地域との連携を一層強化するため、専用の連絡手段や相談窓口の仕組みを整えるとともに、情報の整理や発信方法の工夫を重ねることで、双方にとって安心して効果的なコミュニケーションの実現を目指していきたい。

9 地域理解・地域連携

児童生徒が地域を知り、地域とのつながりを深められる学習機会を用意することができたか。

【評価】 < B >



【評価の根拠（工夫・意識した点、成果）】

昨年度と比べて地域との関わりが増え、外部とのつながりが徐々に広がってきている。サミットデーでは、外部講師を招いた学習や、保護者の協力を得ながら行う活動の機会が増え、児童が楽しみながら地域の文化や歴史を学ぶことができる貴重な経験となった。今後も、地域の力を生かした学習のさらなる充実を図っていきたい。

また、近隣の公園や神社を訪れる活動を通して、教室内では味わえない四季の変化や地域の特色に触れることができ、生活科の学習とも関連付けることができた。町探検やリンゴ狩り、野沢菜漬けやおやき作りなど、地域に根差した体験的な学習を取り入れることで、地域への理解と親しみを深めることができた。

さらに、地元農家を訪問して農業の役割や大切さについて学ぶとともに、学校での野菜栽培を通して学びを深めるなど、探究的な学習も広まりつつある。地域の公園では季節の様子を観察し、地域の人々の過ごし方に目を向ける活動を行ったほか、近隣の園児と交流するためのおもちゃ作りなども実施し、地域との多様な関わりを広げることができた。

【課題と改善点】

児童が地域に出て学ぶ機会については、今後さらに充実させていく必要があると感じている。保健に関しても、児童の成長段階に応じて外部講師や地域の方を招いた講話や授業を計画し、地域とのつながりを生かした学びを提供していきたい。具体的には、薬物乱用防止教室や健康に関する授業などを通して、専門的な知識に触れる機会を設けることが考えられる。

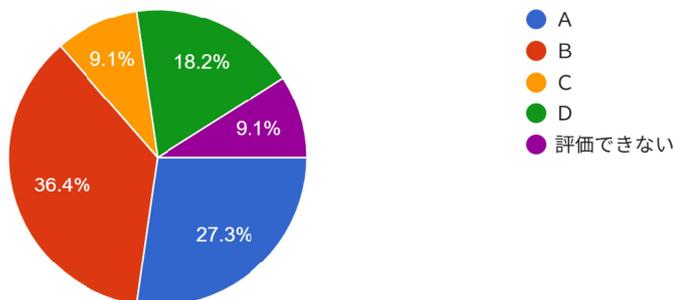
一方で、商店会や自治会など地域の方々との関わりを十分に持つことができず、学習を広げたり深めたりするまでに至らなかったケースもあった。また、2時間続きの授業時間を確保することで、地域の特色や人々の生活についてより深く理解できると考えられるため、時間設定についても工夫していきたい。授業展開においては、教員のねらいと児童の動機付けを一致させることが難しく、児童自身が地域に目を向け、課題や問題を主体的に見いだす力を育てる点に課題が残った。

今後は、他の教職員と連携しながら、地域教材や地域の人材を効果的に活用した学習活動を計画的に取り入れていくことで、児童が地域への理解を深め、つながりを実感しながら主体的に学べる環境を整えていきたい。地域との連携を通して学びをより豊かなものとするとともに、地域の一員としての責任感や参加意識を育むことを目指していく。

10 情報発信

学校・学年・学級等の情報を、保護者や地域に分かりやすく、積極的に発信することができたか。

【評価】 < B >



【評価の根拠（工夫・意識した点、成果）】

Google のポータルサイトを活用し、担任を中心に学級や学年の情報をこまめに発信してきた。Google Classroom は課題提出等において有効に活用され、授業内での歌唱や器楽合奏の様子についても、ポータルサイトを通して積極的に配信することができた。定期的な更新や連絡を心掛け、保護者からの質問にも迅速に対応することで、信頼関係の構築に努めてきた。

また、ほけんだよりや健康診断、身体測定の結果を通して、児童の健康状態や学校における感染症の流行状況などを継続的に伝えてきた。学年ポータルサイトでは、年間活動の振り返りや行事内容を発信し、ペアレンツデーの懇親会においては、サミットデーの取組と各教科との関連について説明することで、保護者の理解を深めることができた。さらに、毎月発行する学校通信を通して学校の方針や取組を丁寧に伝えることで、保護者の理解を深め、協力を得ることにつながった。

一方で、学級や学年の様子を十分に発信できなかつた場面もあり、その結果、保護者に不安を与えてしまったことが課題として挙げられる。

生徒募集に向けた情報発信としては、新しい学校ガイドを作成するとともに、学校ホームページの内容を更新した。いずれも外部業者に委託せず学校内部で制作することで、コストを最小限に抑えながらも、内容や表現に工夫を凝らした質の高い仕上がりを実現することができた。

【課題と改善点】

学年やクラスの情報については、主にポータルサイトを中心に発信してきたが、実際にどの程度の保護者が閲覧しているのかを十分に把握できていないという課題がある。また、保護者からは、オクレンジャーや Google Classroom、ポータルサイトなど、情報発信の媒体が複数あることで、必要な情報を確認しきれないのではないかという意見も寄せられている。今後もこれらの媒体を継続して活用していくのであれば、それぞれの役割や運用方法について、年度当初などの機会を捉えて保護者と共通理解を図ることが必要である。

あわせて、発信媒体そのものの見直しも含め、学校として主導的に方針を明確に示し、情報発信の在り方や内容について、保護者に分かりやすく、見える形で丁寧に説明していくことが求められる。

さらに、地域に向けた情報発信が十分に行えなかつた点も課題として挙げられる。今後は、学校の教育活動や取組を地域にも積極的に発信し、理解と協力を得られるよう工夫していく必要がある。また、言語面での課題により、すべての家庭に対して分かりやすく情報を届けることが難しい状況も見られた。今後は、翻訳支援や多言語での発信も視野に入れながら、情報の内容や発信のタイミングを見直し、教職員間で連携を図ることで、継続的かつ分かりやすい情報共有に努めていきたい。